

[普及事項]

新技術名：‘安芸クィーン’の有核栽培技術（平成13年～17年）

研究機関名 果樹試験場 天王分場

担当者 原加寿子・長澤正士・他2名

[要約]

ブドウ大粒品種‘安芸クィーン’は雨よけ被覆栽培することにより結実が安定し、満開期の新梢長40～60cmで果房重が大きく揃いやすい。また、着房密度は10果房/3.3㎡とすると着色の良好な果房が得られる。

[ねらい]

本県のブドウ栽培は中粒品種の露地栽培が主体であるが、最近の消費者ニーズは、糖度、食味のよい大粒種への志向がみられる。そこで大粒種の普及を図るため、糖度が高く、食味のよい‘安芸クィーン’について被覆施設の利用による安定栽培技術を確立する。

[技術の内容・特徴]

1. 雨よけ被覆することにより、露地栽培より着粒数が多くなった（表1）。
2. 満開期の新梢長が20cm～60cmで、着粒数が多く果粒の肥大が良いことから、大きい果房が得られる割合が高くなり、特に40～60cmで果房の揃いが良好となった（図1、表1）。
3. 樹冠面積3.3㎡当り10果房着果区は15果房着果区より生産量は少ないが、着色が良好な果房が多く得られる（表2、3）。

[普及対象範囲]

県内ブドウ生産地

[普及・参考上の留意事項]

1. 樹勢が強く、新梢伸長が旺盛な場合は展葉数7～9枚期にフラスター液剤500倍液を新梢全体に散布する。
2. 花穂の整形は‘巨峰’に準じ、花穂の下端を1cm程度摘除し、花穂長7～8cm程度に調整する。
3. 着粒数が多いほど果房重は大きくなるが、着色は劣る傾向があるので、多くても30粒程度に調整する。

[具体的なデータ等]

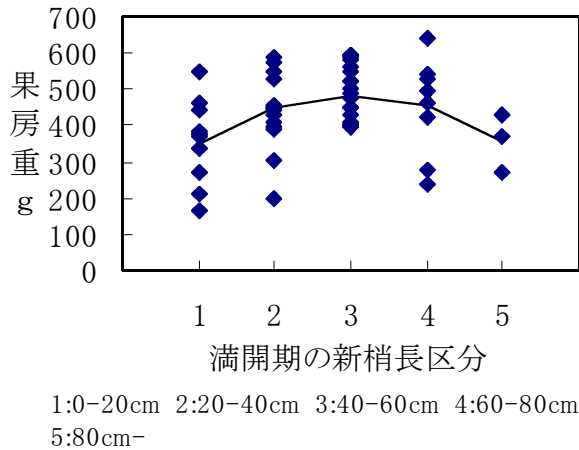


図1 雨よけ被覆区の新梢長と収穫期の果房重(平成15年)

表1 ‘安芸クイーン’の果実品質(平成15年)

区分	新梢長 ^z (cm)	調査 房数	果房重 (g)	果房長 (cm)	着色 ^y	着粒数	着粒 ^x 密度	1粒重 (g)	糖度 (%)	酒石酸 (g/100ml)
雨よけ 被覆区	0-20	10	375.8	16.7	4.4	33.4	2.8	11.5	21.0	0.394
	20-40	10	481.7	16.7	3.5	37.7	3.4	12.7	20.5	0.395
	40-60	10	468.7	17.0	3.1	36.0	3.1	13.0	20.7	0.385
	60-80	8	483.4	17.0	3.5	36.1	3.1	13.3	20.5	0.392
	80-	3	351.4	14.9	5.0	31.7	3.0	11.3	22.7	0.383
露地区	0-20	7	296.0	12.7	4.1	27.6	3.1	11.5	20.0	0.360
	20-40	10	357.4	14.0	3.2	27.7	3.2	12.8	19.7	0.423
	40-60	10	311.9	13.8	2.8	20.5	2.5	15.4	19.6	0.417
	60-80	10	229.2	12.1	4.1	15.4	1.8	15.6	20.7	0.421
	80-	4	231.6	11.7	4.0	14.3	1.7	15.5	20.4	0.421

^z満開期の新梢長 ^y着色：1黄緑、2淡紅、3淡鮮紅、4鮮紅、5濃鮮紅

^x着粒密度：着粒数／果軸長cm

表1 ‘安芸クイーン’の着房程度と生産量(平成15年)

処理区	樹冠 面積 (m ²)	果房数	実際の 着房程度 (房/3.3m ²)	10a当たり ^z	
				果房数 (房/10a)	収量 (kg/10a)
10果房/3.3m ²	33.6	96	9.4	2857	1174
15果房/3.3m ²	58.0	238	13.5	4103	1935

^z10a当たり：樹冠面積当たりの着房数や収量から園地利用率100%で換算

表3 ‘安芸クイーン’の着房程度と果房重の分布(平成15年)

処理区	着色程度分布 ^z (%)				
	1～	2～	3～	4～	5
10果房/3.3m ²	0.0	13.5	41.7	41.7	3.1
15果房/3.3m ²	0.0	17.3	46.8	29.1	6.8

^z着色指数：三重県作成‘安芸クイーン’用カラーチャート

[発表文献等]

なし